モノグラフ
中学生の世界
vol. 52

学校週5日制

静岡大学教授
深谷昌志

目次

要　約 …… 2
プロローグ　学校週5日制の意味するもの …… 4

Ⅰ　中学生調査から

第1章　生徒たちのプロフィール …… 8
1．学校の楽しさ …… 8
2．自己評価 …… 11
3．中学生の疲れ …… 12
第2章　生徒たちの自由時間・日常生活 …… 13
1．部活動の時間 …… 13
2．塾通い …… 16
3．自由な日 …… 17
第3章　7月8日（第2土曜日）の過ごし方 …… 19
1．生活時間 …… 20
2．7月8日の過ごし方 …… 22
3．7月8日の評価 …… 27
第4章　学校週5日制に対する評価 …… 29
1．月2回の学校週5日制による影響 …… 29
2．休日土曜日のとらえ方 …… 32
3．学校週5日制に対する評価 …… 35

Ⅱ　教師調査から

第1章　学校週5日制への対応 …… 38
1．学校の対応 …… 38
2．学校としての対応策（自由記述から） …… 41
3．生徒の土曜休日の過ごし方への評価 …… 42
4．中学校教師の土曜休日の過ごし方 …… 43
第2章　学校週5日制の影響 …… 44
1．中学生への影響 …… 44
2．中学生への影響（自由記述から） …… 44
3．中学校教師への影響 …… 46
4．仕事への影響（自由記述から） …… 46
第3章　学校週5日制に対する評価 …… 48
1．月2回の学校週5日制の現状 …… 48
2．月2回学校週5日制への評価（自由記述から） …… 50
3．完全学校週5日制に対する評価 …… 50

コメント／「学校週5日制」のデータから読みとれること …… 田中統治 …… 52
一日も早い条件整備を …… 長嶋安男 …… 53
「学校週5日制」を考える …… 森永徳一 …… 54
学校週5日制と部活動 …… 横田明宏 …… 55

資料1　調査票見本および集計結果（中学生用） …… 57
資料2　調査票見本および集計結果（教師用） …… 66

＊おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

『モノグラフ・中学生の世界』Vol.52

調査レポート

学校週５日制

要　約

１．中学生調査から

①　第２・第４土曜日の参加

土曜日に部活動に参加している生徒は19.5%、塾通いしている生徒は32.9%である（**p.15 表11**、**p.16 表15**）。１週間に１日も休みのない生徒が23.4%に達する（**p.18 表16**）。

②　生徒の願い

毎日、時間に追われる生活を送っているせいか、「自由に使える時間がもっと欲しい」が53.9%に達する（**p.12 表８**）。

③　７月８日（土）の過ごし方

９時すぎまでゆっくり寝ていた生徒は28.7%である（**p.20 表18**）。その後、テレビやマンガを見たりしてのんびり過ごした生徒が多い（**p.22 表22**）。夜12時すぎまで起きていた生徒が40.5%に達する（**p.20 表19**）。

④　７月８日（土）の両親

休んでいる父親は53.6%、母親は64.0%で、親が不在の家庭が少なくない（**p.25 表24～26**）。

⑤　７月８日（土）の充実感

「わりと」を含めると66.7%が「充実していた」と答えている（**p.28 表28**）。

⑥　休みの土曜日

休みの土曜日の使い方は、「部活動があれば、部活動をするととても思う」が第１位で37.3%、第２位は「のんびり寝たい」で31.8%を占める（**p.32 表32**）。

⑦　第２・第４土曜日の気持ち

「うれしい」と「とても思う」が62.2%に達する（**p.34 表34**）。

⑧　平日の変化

「月曜日に学校に行くのがつらくなった」と「放課後のゆとりがなくなった」と感じている生徒が多く、特に前者は中３に多い（**p.31 表30**）。「授業の進み方が早くなった」という者は成績下位層に目につく（**p.31 表31**）。

⑨　学校週５日制への気持ち

「のんびりできて（44.0％）、うれしい（62.2％）」という生徒が多く、生徒の評価は好意的のように見える（p.34 表34）。

⑩　学校週５日制への希望

「毎週土曜日を休みにして」が69.9％を占める（p.35 表36）。

２．教師調査から

⑪　教師の土曜休日の過ごし方

「家でやり残した仕事をした」者が80.7％である（p.43 表44）。

⑫　学校週５日制の影響

「平日が忙しくなり、持ち帰りの仕事が増えた」という声が多い（p.47 表46）。

⑬　学校週５日制への評価

「今の指導要領のままでは無理がある」という評価が78.5％に達する（p.49 表47）。

⑭　完全学校週５日制への評価

「とても」の55.7％に「やや」の27.8％を含めて83.5％が賛成している（p.51 表48）。しかし、そのためには、高校の入試改革が必要だという声が多い（p.51 表49）。

３．全体として

生徒たちは、第２・第４土曜日にはのんびり起きて、ゆったりと時間を使っている。それだけに、学校週５日制を歓迎する生徒が多い。そして、教師たちも平日が忙しくなったのは確かだが、基本的にはよい制度だと歓迎している。そうした意味では、学校週５日制は「のんびりできる日」という自然な形で社会的に定着したように見える。ただ、指導要領が改正されないで、週５日制だけが進むと、学校生活のゆとりがなくなると心配をする教師が少なくない。

〔調査の実施〕

学校週５日制が実施されて３か月後の７月８日（第２土曜日）の行動を７月10日に尋ねる形をとった。当日の天候は「曇り後雨」の地域が多かった。

〔調査概要〕

対象●宮城・千葉・東京・神奈川・福岡の中学１～３年生2,070名と教師116名（男性66名・女性50名）

時期●1995年７月

方法●学校通しによる質問紙調査

サンプル構成（中学生）

（人）

	男子	女子	計
中１	358	350	708
中２	352	325	677
中３	349	336	685
計	1,059	1,011	2,070

プロローグ

学校週5日制の意味するもの

教材を削減できないのか

学校週5日制をめぐる論議は学校関係者以外にはわかりにくいらしい。欧米の学校は昔から週5日制だったのに、なぜ日本で週5日制の実施が困難なのか理解に苦しむという。

そうしたとき、学校の立場から、土曜日が休日になると、その分の授業をどこかに振り替える必要が生じる。しかし、その時間帯を見つけにくいと説明する。そうすると、現行の授業の中で不必要な時間を減らせばよいのではという反論が戻ってくる。

乱暴な意見のようだが、たしかにその通りで、学習内容を減らせないという前提に立てば、土曜日の授業をどこにはめ込むかが重要になる。それが月に1回なら何とかなる。しかし、月2回では対応が難しい。そして、完全週5日制は学習指導要領の改訂なしに考えられない。現在の週5日制の論議はそうした方向に推移している。

しかし、教材のどこかを削減するつもりなら、この機会に、学校のどの部分をどういう観点から削除するかを論議することが大事になる。残念ながら、これまでの議論ではそういう教育内容の削減の観点から週5日制が取り上げられることが少ないように思われる。

子どもの学習環境が変わった

この原稿はパソコンで執筆している。長年鉛筆で原稿用紙に書き続けてきた筆者でも、いつのまにかパソコンに慣れた。まして、若い研究者の場合、論文を書くとはパソコンに向かうのと同意語で、いずれ、論文を「書く」のではなく、「打つ」時代が来るのかもしれない。

この数年、パソコンの性能が上がり、簡単に打ちやすくなると同時に、価格も下がり、求めやすくなった。いずれ、パソコンが1人に1台とパーソナル化される日も近い。

子どもたちがそういう形でパソコンを利用するようになったとき、子どもたちの学習にどのような変化が生じるのか。いかにパソコンが発達したとしても、文章は作らねばならないから「文章を作る力」は大事だし、人の

文章を読むためにも「字を読む力」は必要であろう。また、ワープロだと「かく」を「書く」「核」「格」などと書けるので、「字を識別する力」も不可欠になる。そうした一方パソコンを打てば字がでてくるので、「字を書く力」はこれまでほど必要でなくなる。

周知のように、ワープロにはファイルの機能が含まれている。データをファイルしておけば、必要な情報を欲しいときにいつでも呼び戻して利用できる。社会科を例にすると、時代の流れや地域の特性などをその子なりにファイルでき、その子専用のノートを作れる。そうなると、山脈の名や人名などを記憶する必要はなくなってくる。

これから先、情報化がさらに進む。そして多機能を持った携帯電話や8ミリビデオなども子どものものになる日も夢ではない。そうした変化が子どもの成長に望ましいかどうかは疑問が残る。しかし、そうした方向は時の流れであろう。

知識を伝達する場としての学校

情報化社会の到来につれて、子どもをとりまく学習環境が変わった。それにしては学校での学習が変わっていないように思われる。

勉強という言葉で連想するのは、どういう学習態度であろうか。学習についての難しい定義はともあれ、素朴に考えた場合、教えられた知識や技能を正確に習得するのが学習の基本であろう。「きちんと字を書く」や「かけ算の九九を覚える」などが、その典型となる。

そして、子どもたちは先生から言われたことを正確に覚えようと努力してきた。もっとも、こうした記憶力中心の勉強のスタイルも子どもたちのかつての生活を考えれば必要なものであった。

明治は古すぎるので、大正の子どもの生活をイメージしてみよう。実際に子どもたちの中で子守などのために学校に行けない子が少なくなかった時代である。学校に行ける子どもも、帰宅してから農業や家業を手助けするのに追われ、遊べるのはごく短い時間だった。

この時代、知識人の家庭を除いては新聞をとっていないし、本などは家庭にないのが当たり前だった。新しい知識が家庭に入ってこない時代である。しかし、学校へ行けば、最新の知識を体系立てて効率よく伝達してくれる。それだけに、学校で新しい知識を覚えてくることの意味は大きい。

なにしろ、テレビや新聞などの情報が家庭に入ってこないのであるから、学校にでも行かないと新しい知識を獲得できない。加えて、情報化の流れの遅い時代では獲得した知識の有効期間が長い。現在のように知識が日進月歩して、すぐに知識の陳腐化が始まることはない。したがって、小学校で覚えたことを生涯活用できたのである。

伝統的な学校の機能は今……

考えてみると、「学校」とは伝達する知識が生涯役に立つのを前提として、学習者に知識の取得を求めていたのであろう。しかし、学校のそうした機能は2つの側面から困難になりつつある。

まず、現代になればなるほど、子どもが一人前になるために求められる知識の量は飛躍的に増大している。歴史の勉強を例にとれば、明治の子どもは江戸時代までを勉強すればよかった。しかし、現代の子は明治、大正そして昭和の歴史を覚えなければならない。その一方、新しい歴史が加わったから、大和時代が不要ということもない。というより、縄文や弥生時代の研究が進んだので、覚えなければならないものはむしろ増加している。

それと同じように、昔ならアフリカや南アメリカの地理はそれほど必要でなかった。しかし、南アメリカの干ばつが日本の食物の値段にはねかえり、アフリカの政治不安がガソリン代に直結するのが現代である。それだけに、世界の地理を学ぶことが大事になる。

さらに、おとなになるために必要という観

点で数え上げていけば、情報化に備えてパソコンを活用できることが望ましいし、国際化のために子どものうちから英語を覚えておいた方がよいということにもなる。

このように、おとなになるために求められる知識の量は増加し、子どもたちの吸収できる範囲を越えつつある。しかし、学校の授業時間は明治も平成も変わりがないので、学校の授業は過密ダイヤとなり、子どもは知識の吸収に追われて疲れはてる感じになる。

それでも子どもたちががんばって、なんとか知識を獲得できたと仮定してみよう。しかし、せっかくの知識も急速な変化の影響を受けて陳腐化していく。理科や技術科、家庭科などの場合、20年前の情報は、かつては正しくても現在では誤りという内容が少なくない。

現在学校で教えていることでも、後10数年もすれば、かなりの内容は訂正を必要としよう。ということは、学校で教えたことを正確に記憶していたのでは困るということになる。

やや図式化して問題を指摘しすぎたかもしれない。しかし、巨視的にとらえたとき、知識伝達型の学校が役割を終えつつあるのはたしかのように思われる。少なくとも、知識の伝達的な機能はかつての社会に適合していたにしても、これからの社会では有効性に乏しい。そうした意味では「知識伝達型」からの学校教育の脱皮が必要になる。

考える力を伸ばす工夫を

「知識伝達型」から学校はどこへ脱皮したらよいのであろうか。情報化によって「記憶する」ことの重みは薄れてきた。パソコンのように記憶しなくとも、書けたり計算できたりする道具を身近に利用できるからである。

しかし、計算機を例にするなら、そうした道具が計算をしてくれるのはたしかだが、式を与えない限り計算を始めない。「式を作る」のは子ども自身がしなければならない。

これまで、式をたてても計算が苦手なので式を検証できない子が少なくなかった。しかし、計算機を利用すれば、計算の苦手な子も文章問題にチャレンジできる。そして、文章題を解くのが算数の目的だとするなら、計算機の利用は算数の目的にかなっていることになろう。

パソコンを例にするなら、字を書くことが苦手でも、パソコンを利用すると長い文章を書ける。もちろん、文章は独りでに書けるものではないので、そのためには文章の構成を考えたり、表現の仕方を工夫することが大事になる。したがって、情報化の到来は学習が不要になったのではない。ドリル的な学習の重みが減り、問題を解決するための「考える力」を育てることがより必要になったといえよう。

ドリルはあくまで学習を進めるための道具作りであろう。これまでの学校では道具がないから道具作りに全力を注いできた。しかしその道具を利用できるようになった。そうだとするなら、道具を使って本来の学習の目的に励めばよいということになる。算数の時間に関連していうなら、ドリルの時間を式の検討に使える。国語は字を覚える時間を文章の構成に利用できる。社会科では知識の伝達は資料にまかせて話し合いに時間を割ける。

このところの新学力観提唱の背景もこうしてとらえると理解しやすくなる。学校が「知識を伝達する場」から「問題解決の方法を考えさせてくれる場」へ転換を迫られているのである。そして、この転換は長い目でみたとき、学校本来の目標に近づくことであり、望ましい変革の方向であろう。

そして、こうした文脈の中に学校の週５日制を位置づけ、教材の削減に踏み切ることができるなら、学校の再生が可能になるように思われてくる。そうした意味では、週５日制の導入を契機として、学校のあり方をとらえ直す必要があろう。

I　中学生調査から

第１章 生徒たちのプロフィール

１．学校の楽しさ

本調査のサンプル構成は、**表１**に詳しい。また、**表２**をみると、学校を楽しいと感じている生徒の方が、そうでないと感じている生徒よりも圧倒的に多く、学校を「あまり楽しくない」「ぜんぜん楽しくない」と感じている生徒は、16.0%にすぎない。

そして、学業成績についての自己評価は**表３**の通りとなる。そして、将来の見通しは、**表４**のように４年制大学進学を望む者が多い。なお、父親と母親の職業構成は**表５**、**表６**に詳しい。

表1　サンプル数

学　年	人　数	%
1　年	708	34.2
2　年	677	32.7
3　年	685	33.1
計	2,070	100.0

性　別	人　数	%
男　子	1,059	51.2
女　子	1,011	48.8

表2　学校の楽しさ × 属性

(%)

	全　体	学　年			性　別		成　績		
		中1	中2	中3	男子	女子	中の上	中	中の下
とても楽しい	22.4	26.4	22.7	17.9	20.4	24.4	25.0	25.8	19.0
わりと楽しい	30.9	32.2	29.4	31.3	29.8	32.2	36.8	30.4	33.2
ふつう	30.7	29.6	29.2	33.1	32.0	29.2	26.8	32.3	33.6
あまり楽しくない	8.9	7.4	9.5	9.8	8.9	8.9	6.8	7.1	8.6
ぜんぜん楽しくない	7.1	4.4	9.2	7.9	8.9	5.3	4.6	4.4	5.6

表3　学業成績

(%)

上の方	中の上	ふつう	中の下	下の方
5.4	17.0	37.2	22.6	17.8

表4　将来の進路

(%)

中学を卒業したらすぐ就職したい	1.8
高校を卒業したら就職したい	21.9
短期大学や専門学校に行くつもり	23.3
ふつうの4年制大学に行くつもり	38.5
かなり難しい4年制大学に行くつもり	7.3
その他	7.2

表5　父親の職業

(%)

会社員	公務員	自営業	サービス業	農林漁業	その他
48.3	12.2	12.6	7.8	0.7	18.4

表6　母親の職業

(%)

専業主婦	パートタイム	フルタイム	自営業	農林漁業	その他
31.2	33.6	10.7	6.6	0.4	17.5

2．自己評価

なお、生徒たちの自己評価を、「自分をどんなタイプだと思うか」という形で尋ねてみた。その結果は**表7**に示す通りで、子どもたちは、自分を「友だちが多く」(「とてもそう」27.0%、「わりとそう」51.7%、計78.7%)、「明るい性格であり」(「とてもそう」23.5%、「わりとそう」52.9%、計76.4%)、「好奇心が旺盛だ」(「とてもそう」23.2%、「わりとそう」44.6%、計67.8%）と、かなり自分を肯定的にとらえている。これだけをみると、明るく活発な子どもらしい中学生像が浮かび、特に現代社会における勉強重視の生活、塾通いの問題、家庭や地域の教育力の低下の問題等、諸問題による弊害は現れていないかのように思われる。

しかし一方で、「地道でコツコツ型」は、「とてもそう」は5.4%と低く、「わりとそう」と合わせても28.9%と3割弱であり、「時間の使い方がうまい」については、「とてもそう」3.4%、「わりとそう」と合わせて18.5%と、さらに低いことがわかる。これは、時間に追われている日常生活におけるゆとりのなさや、勉強に対する不安を表しているのではないかと思われる。多忙な毎日で、計画通りには勉強が進まず、うまくいかないと感じることが多いのだろう。

表7　自分のタイプ

(%)

	とてもそう	わりとそう	あまりそうでない	ぜんぜんそうでない
友だちが多い	27.0	51.7	18.0	3.3
明るい	23.5	52.9	20.5	3.1
好奇心が旺盛である	23.2	44.6	28.4	3.8
服装や髪型に気をつかう	20.5	39.5	31.8	8.2
趣味をたくさん持っている	18.5	35.9	37.4	8.2
スポーツが得意	14.4	34.1	36.6	14.9
地道でコツコツ型	5.4	23.5	49.0	22.1
時間の使い方がうまい	3.4	15.1	56.1	25.4

3．中学生の疲れ

中学生たちに、いくつかの項目を示して、「次のようなことがあてはまるかどうか」を尋ねてみた。結果は**表8**の通りで、第一に「自由に使える時間がもっと欲しい」と感じている中学生が、「とてもそう」53.9%、「わりとそう」28.2%で、合わせて82.1%とかなり高い数値がでている。それだけ中学生は多忙な生活を送っているのであろう。

また、「学校を休みたいという気持ちになる」生徒は、「とてもそう」「わりとそう」合わせて約50%で、2人に1人が学校を休みたいと思っていることになる。しかし、学校が楽しいという生徒が多かった（表2）ことを考えると、学校を休みたくなるのは、学校が嫌いだからというよりも、心身の疲れによるところが大きいと思われる。表8中の「朝、食欲がない」生徒が4割（「とても」＋「わりと」）いることからも、中学生の疲れがうかがえる。

また、7割前後の生徒が、将来の仕事に対してある程度の見通しを持っているのにもかかわらず、「毎日が単調でつまらない」「自分が今一番したいことがわからない」と4割前後（「とても」＋「わりと」）の生徒が感じているという結果が得られている。このことから、将来像はあまり大きい夢を抱いたものではなく、ある程度実現可能なもののようである。現在の中学生は、希望に満ち、目標を持って日々がんばっていくという様子ではなく、どこか元気がなく、気力のない様子が感じられる。

表8　自分の気持ち

(%)

	とても そう	わりと そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
自由に使える時間がもっと欲しい	53.9	28.2	14.0	3.9
将来、趣味を生かした仕事につきたい	45.7	28.1	19.3	6.9
おとなになったら、つきたい仕事がある	43.4	19.7	25.1	11.8
学校を休みたいという気持ちになる	24.5	25.6	34.8	15.1
毎日が単調でつまらない	16.2	22.9	43.3	17.6
自分が今一番したいことがわからない	16.5	24.7	33.2	25.6
朝、食欲がない	16.8	23.0	32.1	28.1

第２章 生徒たちの自由時間・日常生活

１．部活動の時間

中学生たちは、勉強、部活動、塾通い等に忙しく、遊ぶ時間も十分に持てない状況下にある。たしかに放課後に部活動をし、それから塾にも行く、そのような生活では自由に使える時間はほとんどとれないのが実状であろう。

中学生が、現在どのくらい部活動に参加しているかは、**表９**に詳しい。部活動に参加している生徒は、合計で87.8%であり、中でも「運動部に入り、熱心に活動している」生徒は51.1%、「文化部に入り、熱心に活動している」生徒は12.7%で、合計すると63.8%と６割以上もの生徒が部活動に熱心に励んでいる。一方、「部活動をしたことがない」生徒は4.2%とごく少数にとどまっている。

また、**表10**より、部活動の１週間に占める

割合を見てみると、毎日活動している生徒が一番多く、18.2%となっている。週に4回以上参加している生徒は、合計で66.1%にも上り、中学校での部活動の盛んな様子や学校をあげての力を入れた活動ぶりが読みとれよう。

それでは、休みの日の部活動はどのようになっているのか。月に2回の学校週5日制の導入により、休みの日が月2回増えたわけだが、この休日も、部活動に費やされているのか。1週間に1回以上部活動に参加している生徒に、「学校が休みの日にどのくらい参加しているか」を尋ねてみた（**表11**）。

第2・第4土曜日には、約6割の生徒が「その日に部活動はない」と答えている。そ

表9　部活動への参加 × 属性

（%）

	全体	学年			性別	
		中1	中2	中3	男子	女子
運動部に入り、熱心に活動している	51.1	60.1	52.7	39.9	58.4	43.3
運動部に入っているが、あまり熱心に活動していない	16.4	16.8	19.8	12.8	18.2	14.6
文化部に入り、熱心に活動している	12.7	13.7	11.0	13.4	6.0	19.6
文化部に入っているが、あまり熱心に活動していない	7.6	4.4	7.2	11.4	3.3	12.2
現在は入っていない	8.0	1.3	6.1	16.9	8.3	7.8
部活動をしたことがない	4.2	3.7	3.2	5.6	5.8	2.5

表10　部活動への参加回数（週）

（%）

		0回	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回以上
全体		14.5	5.7	5.6	8.1	11.1	17.4	17.8	19.8
学年	中1	8.2	4.0	6.9	8.5	11.9	22.2	19.1	19.2
	中2	9.6	6.4	4.7	9.1	13.4	17.0	19.9	19.9
	中3	26.1	6.7	5.2	6.6	8.1	12.9	14.3	20.1
性別	男子	15.7	5.6	4.7	7.9	9.2	16.5	21.1	19.3
	女子	13.3	5.6	6.7	8.2	13.1	18.4	14.4	20.3

の他の休日と比較すると、「その日に部活動はない」の数値は、日曜日が36.2%、祝日が44.5%、その他の休みの日が37.3%といずれも4割前後である。したがって、第2・第4土曜日とその他の休日とのこの差は、学校週5日制の意義をふまえ、生徒を学校から解放して自由に主体的に生活を送れるよう、部活動を休みにしているためと考えられる。

なお、学年別では中3が休日の部活動に参加している割合が高い（**表12**）。ただ、学校別では、休日に全く部活動がないC校（6.2%）から38.1%が参加するG校まで、部活動の実態には学校差が感じられる（**表13**）。

表11　休みの日の部活動への参加

（%）

	必ず参加している	わりと参加している	半分くらい参加している	たまに参加している	ぜんぜん参加していない	その日に部活動はない
第2・第4土曜日	19.5	10.7	2.9	3.3	3.1	60.5
日曜日	34.5	16.4	4.2	4.5	4.2	36.2
祝日	26.6	15.2	4.6	4.8	4.3	44.5
その他の休みの日	30.4	18.4	5.0	4.6	4.3	37.3

表12　休みの日に部活動 × 属性

（%）

	学年			性別	
	中1	中2	中3	男子	女子
第2・第4土曜日	19.9	18.9	19.6	21.8	17.1
日曜日	34.7	31.6	37.9	36.5	32.5
祝日	24.8	23.6	32.4	29.3	23.9
その他の休みの日	26.8	30.2	34.7	31.7	29.0

「必ず参加している」割合

表13　休みの日に部活動 × 学校

（%）

A校	B校	C校	D校	E校	F校	G校	H校
20.9	15.3	6.2	28.0	22.3	14.2	38.1	24.7

「必ず参加している」割合

2．塾通い

次に、塾通いの実態について見ていく。中学生は、実際どのくらいの割合で塾に行っているのかを調べた。**表14**より、塾に行っていない生徒は約4割で、それ以外は塾通いをしており、中でも週に3回行っている生徒が28.6%と、中学生の塾通いが日常化しているのがわかる。

休みの日の塾通いに関しては、**表15**のように、日曜日と祝日は「その日に塾はない」場合がそれぞれ76.4%、68.9%と多く、あまり塾には行っていないようであるが、一方、第2・第4土曜日では、「その日に塾はない」のは52.1%と半数強であり、日曜日や祝日と比べると塾に行く生徒が多いことがわかる。

文部省は「学校週5日制の実施について（通知）」の中で、「学校週5日制の月2回への移行が過度の学習塾通いにつながらないよう、保護者や学習塾関係者に対して理解と自粛を求めること」と述べ、土曜休日の塾の自粛を要請したといわれる。その効果があったのか、第2・第4土曜日の塾通いはそれほど目立っていない。しかし、32.9%の生徒が通塾していることを考えると、学校週5日制の意義が理解されているとはいえないように思われる。

表14　塾通い（週）

（%）

0回	1回	2回	3回	4回以上
39.8	5.7	15.7	28.6	10.2

表15　休みの日の塾通い

（%）

	必ず行っている	わりと行っている	半分くらい行っている	たまに行っている	ぜんぜん行っていない	その日に塾はない
第2・第4土曜日	32.9	6.7	2.8	4.3	1.2	52.1
日曜日	10.4	3.4	1.3	7.1	1.4	76.4
祝日	14.7	7.0	2.4	5.2	1.8	68.9
その他の休みの日	28.5	12.0	3.5	6.4	1.8	47.8

3．自由な日

それでは、部活動も塾通いもない自由な日は、いったい週何日あるのだろうか。**表16**によると、１週間に１日しか自由な日がない中学生が28.7%ともっとも多く、１日も自由な日がない中学生が、なんと23.4%に達する。先の部活動や塾通いの結果から、これらに参加する時間が長く、多忙な中学生像が浮かんでいた。

週に１日自由な日があるかないかの生活では、外で遊んだり、地域で活動する時間などとれず、休息も満足にとれないから、疲れもたまってくる。そうなると、学校週５日制はとりあえず「生徒の疲れをとる日」として機能せざるをえないのではないか。ただし、**表17**から明らかなように、休みのない割合は学校差が大きい。したがって、中学生を多忙さから救うには休日の部活動のあり方を検討する必要があるのかもしれない。

	休日の部活動参加	部活動も塾もない日
C校	6.2%	51.3%
H校	24.7%	24.6%
D校	28.0%	6.3%
G校	38.1%	15.6%

こうした週に自由な日がほとんどないという結果からも推察できるように、学校での勉強、部活動、塾通いと忙しい毎日の中で、時間に追われるような感じを抱いているのであろう。それだけに表８でもふれたように生徒たちが「自由に使える時間がもっと欲しい」と感じているのであろう。

このように見てくると、中学生自体は、明るく、友だちもたくさんいて、部活動に熱心に参加し、学校も楽しいと思っているようであるが、その反面、多忙で時間に追われるような日常生活の中で、中学生が疲れてしまっている感じが強い。そのため、学校を休みたい、自由時間がもっと欲しいと考えている生徒が多い。今後、土曜休日の過ごし方が改善され、週５日制の意義が十分引き出されるようになれば、部分的にせよ、ゆとりある生活が可能になるのかもしれない。

表16　部活動も塾もない日（週）

（%）

		0日	1日	2日	3日	4日	5日以上
全　体		23.4	28.7	18.6	11.5	7.5	10.3
学年	中 1	23.2	28.6	25.1	10.4	5.6	7.1
	中 2	23.7	35.4	15.0	9.8	5.9	10.2
	中 3	23.4	22.1	15.4	14.4	11.0	13.7
性別	男 子	23.4	29.9	19.1	8.7	7.5	11.4
	女 子	23.4	27.4	18.1	14.4	7.5	9.2

表17　部活動も塾もない日 × 学校

（%）

A校	B校	C校	D校	E校	F校	G校	H校
11.0	29.0	51.3	6.3	12.8	15.6	15.6	24.6

「0日」の割合

第３章　７月８日(第２土曜日)の過ごし方

平成７年４月より月２回の土曜休日が実施された。それでは、実際に生徒たちはその土曜日をどう利用しているのか。土曜休日の１日を取り上げ、中学生がどのように、月に２回の学校週５日制による土曜休日を過ごしているのか、その生活ぶりを探っていくことにしたい。具体的には、学校週５日制が実施されて３か月たち、状況が落ち着いたと思われる平成７年７月８日を調査日と定め、学校には翌週の月曜日（７月10日）に調査票の記入を求めた。なお、あいにくなことに７月８日の天候は曇り後雨の地域が多かった。

1．生活時間

表18によると、この日の起床時間に関しては、9時以降に起きた生徒が3割弱で、8時以降に起きた生徒と合わせると計57.1%と、半分以上が普段よりもゆっくり寝ていることがわかる。まず、ややのんびりとした休日という印象を受ける。就寝時間に関しては、11時すぎの就寝が、計74.4%と大部分を占めており、そのうち、12時以降は40.5%、1時すぎがなんと18.0%にも上っている(**表19**)。ゆっくりと起き、夜遅くまで夜更かしをするといった生活パターンをとっている生徒が多い。

全体として、この休日を生徒たちはどう利用しているのか。**表20**によると、もっとも数値の高かった「友だちとの外出」でも、「ぜんぜんしなかった」生徒が57.5%と半分以上に上っている。その他の項目も「ぜんぜんしなかった」が7割からほぼ10割に上っている。一口にいって、「何もすることもなく、のんびりとした土曜日」という印象を受ける。

もっとも、**表21**に示したように、千葉の中学は部活動がぜんぜんなく（表は「ぜんぜんしなかった割合」）、友だちとの外出が多い（外出は60.2%）地域もあれば、東京の住宅地のように部活動がある（45.5%）地域がみられるので、地域格差は大きい。

それでは、具体的に生徒たちは7月8日にどういう行動をしたのか。表20によると、7月8日には、「部活動をぜんぜんしなかった」中学生が84.4%、「塾での勉強をぜんぜんしなかった」中学生が72.8%と、中学生が学校、塾から解放されていることがわかる。

塾通いについては、先の表15での第2・第4土曜日に塾に「必ず行っている」と答えた中学生の数値（32.9%）が高かった。しかし7月8日の通塾率は予想よりも低く、懸念されたほど塾には行っていないように思える。したがって、ほとんどの中学生が、自由に1日を使うことができ、好きなことをして過ごすことができたのであろう。

表18　7月8日の起床時間

(%)

6時頃	6時～6時半	6時半～7時	7時～7時半	7時半～8時	8時～8時半	8時半～9時	9時以降
8.1	4.2	6.5	11.0	13.1	13.4	15.0	28.7

表19　7月8日の就寝時間

(%)

9時前	9時～10時	10時～11時	11時～12時	12時～1時	1時すぎ
1.3	5.0	19.3	33.9	22.5	18.0

表20　7月8日の過ごし方

(%)

	ぜんぜんしなかった	30分以内	1時間くらい	1時間半くらい	2時間くらい	2時間半くらい	3時間かそれ以上
友だちとの外出	57.5	1.5	1.8	1.8	3.8	3.9	29.7
家の人との外出	66.1	3.1	4.8	3.8	4.5	2.9	14.8
塾での勉強	72.8	2.4	2.5	3.2	8.2	3.4	7.5
部活動	84.4	0.5	1.3	0.5	0.6	1.4	11.3
地域のスポーツクラブなどでの活動	93.8	0.5	0.6	0.6	0.9	0.7	2.9
地域でのボランティア活動など	97.5	0.5	0.4	0.2	0.2	0.1	1.1

表21　7月8日の過ごし方 × 学校

(%)

	福　岡	仙　台	千　葉	東京A	東京B
友だちとの外出	59.5	50.0	39.8	53.7	67.1
家の人との外出	61.8	64.3	72.6	70.6	65.3
塾での勉強	65.7	79.5	77.3	62.5	79.5
部活動	84.9	92.0	99.3	88.8	54.5
地域のスポーツクラブなどでの活動	89.5	92.7	98.2	91.6	92.7
地域でのボランティア活動など	97.9	97.0	97.8	96.7	96.5

「ぜんぜんしなかった」割合　　東京A＝下町　　東京B＝住宅地

2．7月8日の過ごし方

7月8日の中学生の過ごし方について、(1)自由時間（休息など）、(2)地域活動、(3)家族とのふれあい、の3領域に分け、**表22**から見ていくことにしよう。

表22　7月8日にしたこと

（%）

	とてもした	少しした	していない		とてもした	少しした	していない
テレビやビデオを見た	41.2	48.5	10.3	喫茶店やファーストフードの店に行った	10.5	8.6	80.9
マンガや雑誌を読んだ	32.3	39.9	27.8	自転車を乗り回して遊んだ	8.4	10.9	80.7
好きな音楽を聴いた	35.0	33.2	31.8	ゲームセンターに行った	5.4	5.2	89.4
自分の趣味のことをした	29.9	28.4	41.7	トランプなどのゲームをした	2.6	5.4	92.0
1人でボーッとした	17.0	31.8	51.2	映画やコンサートに行った	4.3	0.9	94.8
友だちと遊んだ	35.2	9.3	55.5	カラオケに行った	3.2	0.9	95.9
読書をした	13.1	28.7	58.2	異性とデートした	2.6	1.3	96.1
コンビニやレンタルショップに行った	15.3	25.3	59.4	スポーツ観戦に行った	1.4	1.1	97.5
友だちに電話した	12.1	27.8	60.1	ボランティア活動をした	1.2	0.9	97.9
テレビゲームをした	17.9	18.0	64.1	地域の活動に参加した	1.2	0.8	98.0
自分の服や持ち物などの買い物に行った	17.9	15.0	67.1	家族全員で夕食を食べた	38.9	11.2	49.9
スポーツ(部活動以外)をした	14.4	16.1	69.5	家族でおしゃべりをした	14.4	33.0	52.6
昼寝をした	13.3	16.9	69.8	家族で外食をした	8.7	3.4	87.9
街をブラブラした	14.8	13.9	71.3	家族で日帰りで出かけた	4.1	2.4	93.5
ペット(犬や小鳥など)や花の世話をした	9.8	15.3	74.9	家族で泊まりがけの旅行に行った	1.7	0.2	98.1

（1）自由時間

すでにふれたように、この7月8日は梅雨が残り、全国的に曇り、雨といった空模様で天候に恵まれなかったため、外の活動が少ないことを考慮しなければならないが、自由時間の過ごし方として、数値の高い項目(「とてもした」の数値）をあげると、以下のようになる。

- テレビやビデオを見た　41.2%
- 友だちと遊んだ　35.2%
- 好きな音楽を聴いた　35.0%
- マンガや雑誌を読んだ　32.3%
- 自分の趣味のことをした　29.9%
- テレビゲームをした　17.9%
- 1人でボーッとした　17.0%

「少しした」も合わせると4割強の中学生が、友だちと遊んでいるが、全体として、テレビを見たり、好きな音楽を聴いたりと、家の中で1人でのんびりと過ごしたようである。

「1人でボーッとした」中学生は、「とてもした」が17.0%で、「少しした」も合わせると48.8%と半分弱にも上り、日頃の多忙さからくる疲れの影響が見られ、中学生はこの土曜休日を、体を休め、休息日として用いたようである。

一方、「スポーツ観戦に行った」(「とてもした」1.4%)、「カラオケに行った」(3.2%)、「映画やコンサートに行った」(4.3%)、「家族で泊まりがけの旅行に行った」(1.7%）等は少なく、休日土曜日を、外出して過ごしたり、旅行やレジャー等に活用する傾向はほとんどないようである。出かけるよりは、家の中や身近なところで、のんびりと体を休ませながら好きなことをして過ごしたいといった気持ちが強いのだろうか。ゆっくりと自分の好きなことをして過ごすというのが、ほとんどの中学生に共通して見られた。

（2）地域活動

そうした反面、地域での活動が全くといっていいほど行われていない。部活動や塾での勉強で忙しかったわけではなく、家族や友人ともそれほど長い時間外出していたわけではないので、時間的には十分地域での活動に参加する余裕はあるはずである。それにもかかわらず、「地域のスポーツクラブなどで活動」した中学生は、30分以内しかしていない生徒を合わせても、計6.2%であり、「地域でのボランティア活動など」をした中学生は、計2.5%と極々少数に限られている。「地域の活動に参加した」「ボランティア活動をした」はともに、1.2%（「とてもした」）と低くなっている。日本では身近な地域活動を見い出しにくいのであろう。

なお、属性別の集計結果を**表23**に示したが、学業成績別にみると、成績の中位以下の生徒がテレビやマンガに接している割合が高い。それに対し、上位の生徒は読書をしている。余暇の過ごし方の上手下手が、中学生でも問題になるのであろう。

表23　7月8日にしたこと × 属性

（%）

		テレビやビデオを見た	マンガや雑誌を読んだ	昼寝をした	友だちと遊んだ	1人でボーッとした	読書をした
学年	中 1	41.2	34.5	9.1	33.4	14.2	13.4
	中 2	44.3	31.6	14.6	38.4	17.6	13.2
	中 3	38.0	30.6	30.6	34.0	17.2	12.2
性別	男 子	41.0	33.4	15.8	37.0	17.0	12.0
	女 子	41.4	31.1	10.7	33.3	17.0	14.2
成績	中の上	33.5	25.7	14.2	26.7	14.2	17.3
	ふつう	41.1	33.4	13.2	35.8	15.9	13.3
	中の下	48.9	39.0	14.2	38.9	15.9	12.1

「とてもした」割合

（3）家族とのふれあい

家庭との関連では、この日に中学生の両親が、仕事が休みだったかどうか、両親は家にいたかどうかを見てみよう。父親の仕事が休みなのは約半数で、必ずしも土曜・日曜が休みでないことをうかがわせる（**表24**）。また両親の在宅率は、母親の方が父親に比べると高く、父親が半数弱(「ほとんどいた」28.7%＋「半分以上いた」19.2%）なのに対し、母親は7割強（「ほとんどいた」50.8%＋「半分以上いた」21.7%）である（**表25**）。

中学生の場合、両親が不在でも問題が少ないが、小学生の場合、専業主婦の母親でないと、学校が休みになっても、子どもがカギっ子になる可能性が強い（**表26**）。

もう一度、表20から家族との過ごし方を見てみると、家の人との外出は3時間以上が14.8%、30分以内も合わせて3割強で、予想していたほど高い数値ではなかった。表22から、さらに詳しく見ていくと、

- 家族全員で夕食を食べた　38.9%
- 家族でおしゃべりをした　14.4%
- 家族で外食をした　8.7%
- 家族で日帰りで出かけた　4.1%
- 家族で泊まりがけの旅行に行った　1.7%

となっている。46.4%の父親、36.0%の母親がこの日に仕事があったことを考えると、日帰りで出かけたり、泊まりがけの旅行に行っ

表24　親の休み × 職業

(%)

父　親		母　親	
会社員	63.2	専業主婦	67.5
公務員	72.3	パートタイム	77.3
自営業	25.8	フルタイム	49.1
サービス業	36.8	自営業	55.1
その他	38.1	その他	58.7
全　体	53.6	全　体	64.0

表25　親の在宅

(%)

	ほとんどいた	半分以上いた	少しの時間いた	あまりいなかった	ぜんぜんいなかった	不明
父　親	28.7	19.2	12.4	13.1	16.2	10.4
母　親	50.8	21.7	8.8	6.4	5.5	6.8

たりするのは、難しいことかもしれない。しかし、「家族全員で夕食を食べた」というのが、4割満たない（「少しした」を合わせて約半数）のは、他の社会と比べても低いと思われる。休日でも約半数しか家族とのふれあいを持てないのだとしたら、普段の日は、部活動、塾通い、両親の仕事等のため、さらに家族で共有する時間は持ちづらいであろう。

表26　親の在宅 × 職業

（%）

父　親		母　親	
会社員	32.4	専業主婦	74.1
公務員	35.3	パートタイム	38.3
自営業	26.8	フルタイム	31.4
サービス業	19.5	自営業	54.1
その他	23.3	その他	41.2
全　体	28.7	全　体	50.8

「ほとんどいた」割合

3．7月8日の評価

この7月8日の全体としての感想として、中学生は、過半数が忙しくはなかった（表27）、充実していたと感じている（表28）。特に新しいことや特別なことをしたわけではないが、普段よりもゆっくりと好きなことができ、体も休められたので、まあよい1日だったというのが、生徒たちの感想のように思える。

表27　7月8日は忙しい1日だったか × 属性

（%）

		とても忙しかった	わりと忙しかった	あまり忙しくなかった	ぜんぜん忙しくなかった
全体		16.8	24.4	36.7	22.1
学年	中1	12.9	22.7	42.1	22.3
	中2	17.4	25.0	35.5	22.1
	中3	20.1	25.7	32.3	21.9
性別	男子	15.9	21.4	35.9	26.8
	女子	17.7	27.7	37.5	17.1
母親の職業	専業主婦	15.1	24.1	37.9	22.9
	パートタイム	15.5	24.3	41.0	19.2
	フルタイム	15.3	27.0	36.8	20.9
	自営業	21.0	23.0	31.0	25.0
	その他	13.6	23.0	34.3	29.1
父親の職業	会社員	16.9	23.8	35.9	23.4
	公務員	16.2	25.9	36.3	21.6
	自営業	17.3	24.1	35.0	23.6
	サービス業	11.7	27.5	44.1	16.7
	その他	13.1	23.0	39.9	24.0

表28　7月8日は充実した1日だったか × 属性

(%)

		とても充実していた	わりと充実していた	あまり充実していなかった	ぜんぜん充実していなかった
全体		20.0	46.7	24.9	8.4
学年	中1	20.5	49.5	23.2	6.8
	中2	20.3	45.6	24.1	10.0
	中3	19.1	45.2	27.2	8.5
性別	男子	19.5	45.2	25.2	10.1
	女子	20.5	48.3	24.5	6.7
成績	中の上	19.3	50.0	22.1	8.6
	ふつう	20.1	50.3	22.9	6.7
	中の下	19.1	46.4	27.5	7.0
	下の方	15.7	39.6	29.0	15.7
母親の職業	専業主婦	19.2	48.8	23.2	8.8
	パートタイム	17.2	49.1	25.2	8.5
	フルタイム	18.5	43.8	28.4	9.3
	自営業	17.0	52.0	23.0	8.0
	その他	20.8	39.8	28.4	11.0
父親の職業	会社員	19.1	49.5	22.1	9.3
	公務員	21.6	48.2	24.3	5.9
	自営業	18.0	49.2	23.8	9.0
	サービス業	11.7	53.3	27.5	7.5
	その他	21.1	39.5	30.1	9.3

第４章 学校週５日制に対する評価

これまで、土曜休日（７月８日）の実際の過ごし方を見てきた。そして、のんびりと体を休める中学生の姿が明らかになった。そこで中学生たちが、一般に月２回の学校週５日制についてどのように感じ、学校週５日制をどう評価しているかを明らかにしていきたい。

１．月２回の学校週５日制による影響

まず、月曜日から金曜日までの平日についての感じを**表29**の形で尋ねてみた。この中で目につくのは、「月曜日に学校に行くのがつらい」と３割以上もの生徒が「とてもそう思う」と答えている事実であろう。「わりとそう思う」も合わせると半数以上にも上り、休み癖的な傾向が見られる。土曜休日による２連休は、心身をリフレッシュさせ、活力を生み出すが、それでも、もう少しのんびりしたいと思う中学生が多いのであろう。

次いで、「放課後のゆとりがなくなった」41.6%（「とても」20.2%＋「わりと」21.4%）、「学校生活が忙しくなった」38.1%（「とても」16.7%＋「わりと」21.4%）、「授業の進み方が早くなった」36.7%（「とても」11.3%＋「わりと」25.4%）があげられている。

これらの数値の高さから、月２回の学校週５日制における現在のカリキュラムに問題があるといえよう。生徒の学力を維持するため月に２回土曜日が休みになっても授業時数は確保し、主に行事の削減等で対応しているところに、無理がでているのだろう。生活にゆとりを持たせるはずが、逆に詰め込み式の窮屈な授業、カリキュラムで、生徒の平日の学習負担を増やし、疲労度を増すことになりがちだが、こうした問題は教師調査の結果をふまえて考察することにしたい。

表29　月曜日から金曜日までの学校生活

（%）

	とても そう思う	わりと そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	ぜんぜん そう思わない
月曜日に学校に行くのがつらい	31.5	21.0	18.1	13.1	16.3
放課後のゆとりがなくなった	20.2	21.4	24.0	21.6	12.8
学校生活が忙しくなった	16.7	21.4	29.6	19.6	12.7
授業の進み方が早くなった	11.3	25.4	34.1	18.8	10.4
行事の準備のための時間が少なくなった	12.2	18.3	35.5	19.9	14.1
部活動をする時間が減った	7.3	9.3	24.7	24.0	34.7

なお、学年別にみると、学校のゆとりのなさを感じるのは中学1年生、それに対し「月曜日の行きにくさ」を味わっているのは中学3年生たちである（**表30**）。また、成績の下位の生徒たちが授業の進み方が早くなったのを実感している（**表31**）。学業成績が中位以下で勉強の苦手なタイプに授業のスピードが上がった影響がでているように思われる。

表30　月曜日から金曜日までの学校生活 × 属性

（%）

	学年			性別	
	中1	中2	中3	男子	女子
月曜日に学校に行くのがつらい	28.9	30.7	35.0	36.5	26.3
放課後のゆとりがなくなった	22.0	20.0	18.5	19.3	21.1
学校生活が忙しくなった	18.1	16.8	15.3	16.4	17.1
授業の進み方が早くなった	8.4	12.1	13.3	10.5	12.0
行事の準備のための時間が少なくなった	7.3	12.7	16.6	10.6	13.8
部活動をする時間が減った	3.9	6.6	11.6	9.1	5.2

「とてもそう思う」割合

表31　授業の進み方が早い × 成績

（%）

	とてもそう思う	わりとそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	ぜんぜんそう思わない	とても＋わりと
中の上	8.6	20.7	32.8	26.8	11.1	29.3
ふつう	8.0	25.4	35.9	20.8	9.9	33.4
中の下	11.1	25.3	41.3	15.2	7.1	36.4
下の方	14.7	26.7	31.2	13.7	13.7	41.4

2．休日土曜日のとらえ方

生徒たちは第２・第４土曜日をどのように感じているのだろうか。この休日土曜日の過ごし方としては、「のんびりと寝る」31.8%（「とても」の数値、以下同様）、「ゆっくりマンガを読む」19.3%と、やはり勉強から解放されて、のんびりと体を休めたいと思ってい

表32　休みの日の土曜日の使い方

（%）

	とても そう思う	わりと そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	ぜんぜん そう思わない
のんびりと寝る	31.8	25.4	16.8	12.4	13.6
部活動があれば、部活動をする	37.3	21.5	16.3	6.4	18.5
ゆっくりマンガを読む	19.3	21.3	22.0	18.1	19.3
何か新しいことを試みる	19.0	21.2	25.8	11.5	22.5
塾があれば、塾へ行く	19.6	18.0	17.8	8.2	36.4
家の人と外出する	12.0	23.0	24.7	15.4	24.9
勉強のまとめや予習をする	5.9	17.2	29.5	21.8	25.6
家の人と雑談をする	5.2	10.9	29.4	22.4	32.1
ボランティア活動をする	2.6	6.4	27.3	16.0	47.7

るのがわかる（**表32**）。しかし一方で、「部活動があれば、部活動をする」37.3%、「何か新しいことを試みる」19.0%と、中学生らしい意欲的な姿も見られる。せっかく増えた休日に何か新しいことを始めたいと思っているのであろう。しかし、何か始めたいのだけれど、何をしていいかわからないといった状態の生徒が多いのであろう。現時点では、「ボランティア活動をする」は2.6%と非常に低いが、今後土曜休日が定着して生徒たちにより活用されるようになれば、ボランティア活動などももっと活発化していくであろう。

なお、属性別では、部活動や新しいことをしたいのが中1で、中3は「のんびりと寝る」と答えている（**表33**）。中3は高校受験を意識して緊張した毎日を送っているのであ

表33　休みの日の土曜日の使い方 × 属性

（%）

	学年			性別		成績		
	中1	中2	中3	男子	女子	中の上	ふつう	中の下
のんびりと寝る	26.5	31.7	37.6	30.2	18.5	27.8	31.7	29.1
部活動があれば、部活動をする	44.5	36.9	30.6	40.7	33.9	39.6	42.7	32.8
ゆっくりマンガを読む	18.9	18.6	20.4	20.1	18.5	14.9	20.0	17.3
何か新しいことを試みる	21.7	18.2	17.2	19.0	19.1	24.2	18.8	13.0
塾があれば、塾へ行く	18.8	15.5	24.3	23.0	16.0	19.9	21.0	17.0
家の人と外出する	15.4	10.4	10.2	8.1	16.0	12.1	10.7	10.3
勉強のまとめや予習をする	5.3	4.5	8.0	6.2	5.6	8.2	4.9	3.8
家の人と雑談をする	5.3	4.9	5.5	4.1	6.2	8.2	4.4	2.4
ボランティア活動をする	2.3	2.4	3.0	3.3	1.8	2.9	2.0	2.4

「とてもそう思う」割合

ろうか。

そして、全体としては、**表34**のように、中学生は、第２・第４土曜日は「のんびりできて」(「とても」44.0%＋「わりと」27.4%＝71.4%)、「うれしい」(「とても」62.2%＋「わりと」18.5%＝80.7%）と大歓迎している。

こうした傾向は属性を超えて認められ（**表35**)、第２・第４土曜日は「うれしくて楽しくてのんびりできる」、そんな日としてとらえられている。そうだとするなら、学校週５日制は順調な滑り出しを見せたといえるのではないだろうか。

表34　第２・第４土曜日の感じ

(%)

	とても そう思う	わりと そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	ぜんぜんそう 思わない
うれしい	62.2	18.5	10.4	3.9	5.0
楽しい	47.1	21.7	20.4	5.3	5.5
のんびりする	44.0	27.4	14.3	7.2	7.1
退屈だ	9.0	10.8	19.7	20.3	40.2

表35　第２・第４土曜日の感じ × 属性

(%)

	学年			性別		成績		
	中１	中２	中３	男子	女子	中の上	ふつう	中の下
うれしい	67.4	56.2	62.9	64.6	59.8	61.6	60.7	60.1
楽しい	49.7	44.6	47.1	52.4	41.7	45.9	46.4	44.2
のんびりする	43.7	39.7	41.7	45.0	43.1	42.3	45.4	40.2
退屈だ	7.9	9.3	9.7	8.9	9.0	7.5	7.8	9.2

「とてもそう思う」割合

3．学校週５日制に対する評価

それでは、生徒たちは学校週５日制についてどのように考えているのであろうか。**表36**によれば、「毎週土曜日は学校を休みにする」が７割と、完全週５日制にかなり高い支持を示している。「今と同じように月２回土曜日を休みにする」は21.6％で、基本的に土曜日を休日にする方向に賛成と見られる。そして**表37**でも、属性を超えて、完全学校週５日制を望む声が大きい。

先の表34で、中学生たちが現在の月２回の土曜休日を、「うれしくて楽しい」と評価していたことからもこの結果はうなずけるが、いずれにせよ、どの生徒も学校週５日制にはほぼ賛成であり、「のんびりできる日」として生徒たちの間に定着していることがわかる。

表36　学校週５日制への希望 × 属性

（％）

	全体	学年			性別		成績		
		中１	中２	中３	男子	女子	中の上	ふつう	中の下
毎週土曜日は休みにする	69.9	73.7	64.3	71.8	76.0	63.6	64.9	69.4	71.9
月２回休みにする	21.6	21.8	24.3	18.6	17.8	25.6	24.0	23.7	20.8
月１回休みにする	4.1	2.0	5.7	4.6	3.0	5.2	5.0	3.2	4.1
毎週土曜日も学校がある	4.4	2.5	5.7	5.0	3.2	5.6	6.1	3.7	3.2

表37　学校週５日制への希望 × 属性

（％）

父親の職業		母親の職業		学校	
会社員	70.7	専業主婦	69.4	福岡	66.1
公務員	67.9	パートタイム	68.3	仙台	57.6
自営業	68.9	フルタイム	69.1	千葉	81.7
サービス業	74.2	自営業	67.3	東京下町	57.6
その他	65.6	その他	72.7	東京住宅地	60.3

「毎週土曜日は休み」を望む割合

Ⅱ 教師調査から

第１章 学校週５日制への対応

月２回の学校週５日制が導入されて、平成７年４月より、月に２回、学校週５日制が実施された。ここでは、中学校教師に対するアンケート調査の結果から、教師たちが学校週５日制についてどう考えているのかを、現時点での学校側の対応や、月に２回の学校週５日制導入下での中学生や教師への影響などと関連させて考えていきたい。

１．学校の対応

まず、教師調査のサンプルは今回調査を依頼した学校の先生に匿名で回答を求める形をとった。回答を得たのは**表38～40**のような116名である。

また、学校環境や中学生についての評価は**表41**の通りである。まず、現在の中学生の親は、皆ある程度教育熱心であり、周りのおとなたちも、子どもたちに対して関心が高いと見ている。そういった教育熱心な環境に身を置いている中学生は、学校でほとんどが、真面目に落ち着いた学習態度を示しており、特に問題はないといえる。

しかし、学校外の活動については、中学生の近所に学習塾が数多く存在しており、塾が身近な存在となっていることから、過度の塾通いに対する懸念を感じている教師が多い。また、中学生が土日に過ごす場所があまりないこと（66.1%）などから、教師は生徒の放課後や休日の過ごし方に多少心配を感じているようにみえる。さらに、「生徒の校外活動が把握しやすい」かどうかについては、69.3%と７割弱（「あまりそうでない」＋「そうでない」）が否定的であり、学校外の生徒の生活に関しては、目が届かないというのが現状のようである。

それでは、結果の報告に入ろう。月２回の

学校週5日制に対応するにあたり、学校週6日制を念頭に置いた現行の学習指導要領に規定されている標準授業時数に従わなくてはならないため、この授業時数の確保が問題となる。文部省の「審議のまとめ」の「月2回の学校週5日制の実施にあたっての留意事項」によると、

「授業時数の運用については、学校行事、各教科等外活動の時間の精選、短縮授業の見直しなどを総合的に工夫し、休業土曜日以外の曜日への授業時数上乗せは、子どもの学習負担や生活リズムに十分配慮した対応が必要である。学校行事の精選では教育的効果を検討して判断する」

とある。学校週5日制の実施には、子どもの学力維持のため、標準授業時数の確保は絶対的条件であって、休業土曜日分の授業時数の確保は、教科以外の時数を削減したりすることで対応することが求められている。また一方で、学校週5日制の趣旨においては、現行の学習指導要領が目指す新しい学力観に立った学校教育を実現することが含まれており、そのための学校の対応として、新しい学力観に立った教育課程の見直しもあげられている。

このことから、授業内容自体を見直すことなしに、単に授業時数の確保だけに注目していたのでは、学校週5日制の趣旨に沿った教育改革とはいえない。そうはいっても、授業時数を確保することだけでも困難な問題なので、ここでは授業時数の確保に焦点を当てて、学校側の対応を見ていくことにしよう。

「標準時数を確保するため、月2回の週5日制に、どう対応しているか」と、学校の対応について尋ねたところ、**表42**のような結果が得られた。「学校行事を削減・統合する」は92.2%と、ほとんどの学校でとられていることがわかる。次いで、「学校行事を各教科の活動と統合する」も多く、現段階では、ど

表38　性別

男　性	女　性	計
66人	50人	116人

表39　担当学年

1　年	2　年	3　年
34人	37人	35人

表40　教職経験年数

1～5年	6～10年	11～15年	16～20年	21年以上
15人	21人	38人	23人	19人

の学校も行事の精選によって授業時数を確保している。短縮授業の見直しについては、消極的な学校が多いようで、また、「時間を要する活動を夏休み期間に回す」といった対応もとられていないことがわかる。

表41　学校・生徒を取り巻く環境

(%)

	とてもそう	まあそう	あまりそうでない	そうでない
生徒たちは落ち着いた学習態度を示している	14.8	75.7	8.6	0.9
生徒の父母は教育熱心だと思う	20.0	69.6	10.4	0.0
学校の近辺に学習塾が多い	29.8	57.9	10.5	1.8
学区のおとなたちが子どものことに関心を持っている	11.3	70.4	17.4	0.9
生徒のほとんどが共働き家庭だ	6.1	66.0	27.0	0.9
学校が長い伝統を持っている	23.5	42.6	29.6	4.3
中学生が土日を過ごす居場所が少ない	7.0	59.1	28.7	5.2
部活動が盛んな学校だ	2.6	56.5	34.8	6.1
生徒の校外活動が把握しやすい	0.9	29.8	63.2	6.1

表42　学校週5日制に対する学校の対応

(%)

	はい	いいえ
学校行事を削減・統合する	92.2	7.8
学校行事を各教科の活動と統合する	50.4	49.6
校時を短縮する	15.2	84.8
時間を要する活動を夏休み期間に回す	6.4	93.6
始業・終業式の日に授業を行う	0.9	99.1

2．学校としての対応策（自由記述から）

なお、教師たちに自由記述の形でいくつかの項目を尋ねてある。学校の対応についての記述の主なものをあげると、以下のようになる。

1＝「授業時間を6時限にすると同時に、テストを土曜日に実施」（27歳、男性、国語）

2＝「休みの土曜日の時間を火曜日の1時間目に上乗せ」（40歳、男性、理科）

3＝「隔週の火曜日が5時間から6時間へ。文化祭を半日に」（42歳、女性、家庭科）

4＝「火曜日の授業時間を増やす。道徳の時間の減少」（35歳、女性、美術）

5＝「学校行事の準備を放課後に」（35歳、女性、国語）

6＝「第2・第4土曜日のある週の授業時間を増やす」（27歳、女性、数学）

7＝「土曜日を学活と選択にあて、土曜日の授業時間を削減」（31歳、女性、体育）

8＝「土曜日を学活や創造の時間にあて、授業を組まない」（46歳、男性、教務主任）

9＝「5日の週と6日の週に分け、5日の週は道徳、学活、書写をカット」（31歳、男性、数学）

10＝「時間割を2週で1ローテーションになるように編成」（40歳、男性、社会）

3．生徒の土曜休日の過ごし方への評価

「生徒の土曜休日の過ごし方についてどう思うか」についての中学教師の評価は**表43**の通りである。まず、「家庭によって過ごし方に差がある」は、「とてもそう」49.1%、「いくらかそう」と合わせるとほぼ全員の教師がそう感じている。

生徒の時間の過ごし方について、教師たちは「友人たちと外出することが多いようだ」「学習塾に通う生徒が増えている」と感じている。しかし、すでにふれた生徒調査によれば、友人との外出や塾通いをした生徒はそれほど多くはなく、実際の中学生は家の中で1人でのんびりとしていた。その辺に教師と生徒との認識のずれが感じられる。

表43　生徒の土曜休日の過ごし方

（%）

	とてもそう	いくらかそう	そうでない
家庭によって過ごし方に差がある	49.1	50.0	0.9
友人たちと外出することが多いようだ	31.9	64.6	3.5
学習塾に通う生徒が増えている	16.8	54.0	29.2
趣味や余暇を楽しんでいるようだ	11.4	73.7	14.9
生活が不規則になっている	5.2	54.8	40.0
部活動を要望する声が高まっている	4.4	24.8	70.8
部活動をしている生徒が増えている	1.8	33.0	65.2
地域の活動に参加しているようだ	0.9	23.2	75.9
過ごし方について親からの相談が多い	0.0	14.9	85.1

4．中学校教師の土曜休日の過ごし方

それでは教師たちは土曜休日をどう過ごしているのか。「最近の土曜休日」の過ごし方について質問した結果が**表44**であるが、表から、中学校教師は休日と仕事が合わさったような過ごし方をしていることがわかる。「家でやり残した仕事をした」が80.7%となんと8割にも上り、「クラブ活動の指導をした」が24.1%、「クラブ活動の指導以外に出勤した」が29.8%で、学校に出勤した教師は合計53.9%で、半数強に上る。休日だというのに学校に出勤し、家では、平日に多忙でやりきれなかった仕事を学校から持ち帰ってする。教師の仕事の負担は大きく、休日でさえも仕事で忙しい様子が明らかにわかる。「休養を十分とった」教師は、50.9%と2人に1人である。休日とはいえ、教師は生徒のようにのんびりと好きなことをして過ごすというわけにはいかないように見える。

表44　教師自身の土曜休日の過ごし方

(%)

	あてはまる	あてはまらない
家でやり残した仕事をした	80.7	19.3
自分のことに時間を割いた	65.2	34.8
休養を十分とった	50.9	49.1
自分自身の勉強ができた	46.5	53.5
クラブ活動の指導以外に出勤した	29.8	70.2
クラブ活動の指導をした	24.1	75.9
地域で活動した	21.9	78.1

第2章 学校週5日制の影響

1．中学生への影響

月2回の学校週5日制の導入が生徒へ与えた影響を教師たちはどう感じているのか。**表45**のように、学力の面では、「学力が落ちている気がする」が「とてもそう」は1.7%、「まあそう」と合わせても約2割と、当初から心配されていた生徒の学力低下は、それほど起こってはいないように思える。これは、授業時数の確保に配慮した学校の対応、中学校教師の努力の成果といえるのであろう。しかし、「進度の早い授業についてこられない生徒が増えた」が3割（「とても」＋「まあ」）と、やや数値が高くなることから、限られた時間の中で授業を進める難しさを感じている教師が多い。

また、「月曜日の授業がのりにくくなった」が4割（「とても」＋「まあ」）と高い数値がでている。これは、中学生に対するアンケートに「月曜日に学校に行くのがつらい」が5割強（「とても」＋「わりと」）であった結果とも対応するもので、これから先、休み明けの月曜日の遅刻や欠席が増えるのかもしれない。

2．中学生への影響（自由記述から）

ここで、教師たちの自由記述の中から中学生への影響についての感想を紹介しておきた

い。

1＝「月曜日にだらけている生徒が増えた」(27歳、女性、数学)

2＝「月曜日に休む生徒が増えた気がする」(48歳、女性、理科)

3＝「先生にはよい休養になるが、生徒がうまく時間を使っていないので心配になる」(23歳、女性、家庭科)

4＝「土曜日にのんびりしている生徒が多いと思うが、過渡期はこれでよいと思う」(59歳、男性、社会)

5＝「105時間が確保できなければ、以前に比べ、学力が低下するだろう」(45歳、男性、教務)

6＝「先生と生徒のふれあいがなくなり、生徒の中には孤立している子が増えた」(48歳、男性、数学)

7＝「家庭学習をきちんとしている子とそうでない子とで学力差が大きくなった」(35歳、女性、国語)

8＝「平日の授業時間が増え、生徒の生徒会や部活動の時間が減った」(36歳、男性、数学)

表45　教師の目から見た生徒への影響

(%)

	とてもそう	まあそう	あまりそうでない	そうでない
ゆっくり休めて気分が充実している	19.5	39.8	30.1	10.6
月曜日の授業がのりにくくなった	7.8	33.0	49.6	9.6
生徒指導上の問題が増えた	3.5	30.4	51.3	14.8
進度の早い授業についてこられない生徒が増えた	2.6	28.1	58.8	10.5
宿題などの課題を与える必要がある	1.7	26.1	57.4	14.8
学力が落ちている気がする	1.7	19.1	65.3	13.9

3．中学校教師への影響

「月２回の学校週５日制により、仕事への影響があったかどうか」との問いに（**表46**）、「平日が忙しくなった」に「とてもそう」と感じている教師は、49.1％と約半数にも上り、「まあそう」37.9％と合わせると計87.0％と高い数値になる。「そうでない」と答えた教師がわずか0.9％というのも注目できる数値であり、ほとんどの教師が、月２回の学校週５日制により、平日の仕事が忙しくなったと感じていることになる。次いで、「持ち帰りの仕事が多くなった」は72.4％（「とても」＋「まあ」）、「生徒の相談に応じる時間的余裕がない」は73.7％と、その忙しさは大変なものである。

月２回の学校週５日制は、生徒・教師ともどもの生活、学校生活にゆとりをもたらすという意義を持つものであり、そして教師に週休２日制を波及する流れを汲むものでもあったはずであった。しかし、このデータの数値では、休日が増えてもその分平日の仕事負担が増大し、さらに、持ち帰りの仕事まで増えているという現状にある。膨大な雑務に追われる毎日で、その忙しさから生徒一人一人と接したり、相談に応じる時間もとれないというのでは、生徒に目が行き届かなくなり、学校が潤いのない勉強を教えるだけの場になりかねない。

学力維持に関しては、月２回の週５日制による授業時数削減にもかかわらず、「授業の進度の遅れが気になる」は、「とてもそう」がわずか7.0％であり、「まあそう」と合わせて３割強と、教科時数を維持し、その分行事の精選等を図ったりといった努力の成果がうかがえる。これは、表45の生徒の「学力が落ちている気がする」者が少数にとどまったのと相対するものであろう。

しかし現状では授業、学力面の対応に目を向けざるを得ない。そして、少しでも学力低下を招かないよう力を注ぐ結果、教師の忙しさを増大させ、生徒との時間も十分にとれない状況を生み出しているのかもしれない。

4．仕事への影響（自由記述から）

教師たちの自由記述によれば、仕事への影響として以下のような内容があげられている。

1＝「授業時間の確保を重要視するあまり、生徒も教師も忙しくなりすぎている。本来の目的通り、ゆったりと授業したいと思う」（45歳、男性、理科）

2＝「話し合いや班単位の活動が減り、生徒が活躍する学習場面が少なくなった」（35歳、女性、国語）

3＝「日曜日に部活動の指導をしているので、土曜日の休みは助かる」（44歳、男性、社会）

4＝「部活動の顧問をしていると、これまで休みがぜんぜんなかった。土曜日を元気回復の日に当てることができる」（59歳、男性、社会）

表46　学校週５日制による仕事への影響

（%）

	とてもそう	まあそう	あまりそうでない	そうでない
平日が忙しくなった	49.1	37.9	12.1	0.9
持ち帰りの仕事が多くなった	38.8	33.6	21.6	6.0
生徒の相談に応じる時間的余裕がない	32.5	41.2	22.8	3.5
ホームルームの時間がとれない	21.6	33.3	35.2	9.9
授業の進度の遅れが気になる	7.0	24.3	49.6	19.1
部活動の指導時間が増えた	3.7	11.9	61.5	22.9

第３章 学校週５日制に対する評価

これまで、学校週５日制に対する学校の対応や、中学生・教師への影響、中学生・教師の土曜休日の過ごし方について考察してきた。そして、標準授業時数確保による窮屈なカリキュラム、平日の生徒の学習負担と教師の仕事負担の増大など、いくつかの問題も明らかにしてきた。それでは、全体として、教師たちは学校週５日制をどう評価しているのだろうか。

１．月２回の学校週５日制の現状

現在の月に２回の学校週５日制について、その実施から１学期を過ごしてみて、中学校教師はどう感じているのか。

表47のように、第一に、「今の指導要領のままでは無理がある」と８割弱もの教師が「とてもそう思う」と感じている。現行の学習指導要領に定められた標準授業時数を確保しなくてはならないため、行事削減等で何とか現在は対応しているものの、やはりそれには無理があり、平日の学校生活にゆとりがなくなったというのがその理由としてあげられるだろう。

いずれにせよ、学習指導要領の改訂もなく、行事の精選だけで完全週５日制に対応することはできず、短縮授業の見直し等も積極的に行わざるを得なくなる。それだけに、今後の学校週５日制の授業時数確保には、学習指導要領の改訂が不可欠になろう。

次に、中学生の家庭での過ごし方については、３割が「家庭にまかせても大丈夫だ」としており、「いくらかそう思う」を合わせると９割方の教師が休日は家庭にまかせてよいと考えている。

その他の過ごし方としては、土曜休日の部

活動や塾通いに対する評価は低く、この日は自由に活動できるように生徒を日頃の多忙な生活から開放すべきとの認識が見られる。また「中学生が参加できる地域活動が少ない」という声が高く、せっかくの休日が地域での活動に結びつきにくいと感じている。

表47　学校週5日制に対する評価

(%)

	とても そう思う	いくらか そう思う	そうは 思わない
今の指導要領のままでは無理がある	78.5	17.2	4.3
基本的に家庭にまかせて大丈夫だ	31.9	57.8	10.3
中学生が参加できる地域活動が少ない	30.2	54.3	15.5
生徒の余暇活動によい効果がある	21.7	64.4	13.9
家庭での過ごさせ方に問題がある	13.9	55.7	30.4
家庭学習による補充が必要だ	6.9	49.1	44.0
過ごし方を学校で指導する必要がある	2.6	49.6	47.8
部活動を行うことも必要だ	8.8	35.1	56.1
塾に通うこともやむを得ないと思う	1.7	40.9	57.4

2．月2回学校週5日制への評価（自由記述から）

教師たちの自由記述によれば、学校週5日制はよいが、平日の多忙さをなんとかしてほしい、そのためには、学習指導要領の改訂が必要と訴えている。

1＝「世間一般の流れが完全週休2日制になっているので、学校もその流れに乗るべきだと思う」（27歳、男性、国語）

2＝「リフレッシュできる土曜日と対照的に平日が忙しすぎる」（25歳、女性、英語）

3＝「土曜日はのんびりできるが、平日はたいへん忙しくきゅうきゅうしている」（45歳、男性、理科）

4＝「現状では週2回がぎりぎり。完全実施を目指すなら教育内容の精選をしてほしい」（48歳、女性、理科）

5＝「はやく学習指導要領を改訂して、無理のないゆとりのある完全週5日制を実施してほしい」（48歳、男性、数学）（47歳、女性、理科）（33歳、女性、美術）など多数

6＝「現行の指導要領では授業の消化がとても無理」（39歳、男性、数学）
「指導要領や標準時間の検討なしに週5日制を行うのは無茶な話です」（35歳、女性、国語）

7＝「教員の働きすぎにブレーキをかけるのによいと思います。しかし、現状のままでは、他の日は詰め込みでぎゅうぎゅうです」（33歳、男性、国語）

8＝「自分個人としては家族と一緒に暮らせる時間が増えたが、今の指導要領だと、授業の進度を守るだけで精一杯。授業の質が低下したような気がする」（27歳、女性、英語）

9＝「自分の行動半径が広がり、生徒たちに新しい話ができるようになった」（40歳、男性、理科）

3．完全学校週5日制に対する評価

これまでふれたように現在の月2回の学校週5日制は、平日の多忙さを招いたものの、「のんびりできる土曜日」として定着してきている。それでは、完全週5日制に対してはどのような見通しを抱いているのか（**表48**）。教師たちは多くの問題を抱えながらも、半数以上の55.7%が完全週5日制に対し「とても賛成」だと回答している。さらに、「やや賛成」を合わせると83.5%にも上り、逆に「とても反対」と回答した教師はわずか1.7%である。ここから、ほとんどの教師が共通して完全週5日制に対して賛成であると肯定的立場をとっており、完全週5日制の実現に明るい展望が持てる。

この完全週5日制実施の際に、改善すべきことは、**表49**の通りである。「高校入試制度を抜本的に見直すべきだ」に「とてもそう」が58.9%で、「そうでない」は4.5%である。高校入試の制約を取り払わないと週5日制になっても、のびのびとした成長を促すゆとりある教育を目指すことは空論になってしまうというのであろう。

学校週5日制に対応した社会のあり方としては、生徒が休日に主体的に活動できるような地域の受け皿、家族と十分ふれあいが持てるように家庭での受け皿を用意していかなけ

ればならない（「とてもそう」44.3%）。そしてこれに対応し、「学校の守備範囲を狭く」（「とてもそう」37.5%）し、子どもたちを学校から家庭や地域に戻していき、本来の家庭・地域の教育力を発揮させていくよう促していくべきだ。そして、今後の学校週5日制の下での教育は、学校、家庭、地域が連携し、それぞれの役割を果たすことで十分意味を持ち得ると感じている教師が多い。

以上のように、教師たちは「高校入試制度を抜本的に見直す」「家庭や地域にもっと受け皿を用意する」といった対応が学校週5日制には必要であり、この対応がとられたとき、学校週5日制は十分意義を発揮すると考えている。

表48　完全学校週5日制に対する評価

（%）

とても賛成	やや賛成	どちらともいえない	やや反対	とても反対
55.7	27.8	12.2	2.6	1.7

表49　完全週5日制の実施に向けて

（%）

	とてもそう	いくらかそう	そうでない
高校入試制度を抜本的に見直すべきだ	58.9	36.6	4.5
家庭や地域にもっと受け皿を用意すべきだ	44.3	46.1	9.6
学校の守備範囲を狭くしてかまわない	37.5	51.0	11.5
学校の教科指導をもっと充実すべきだ	17.5	50.0	32.5
学校の特別活動をもっと充実すべきだ	9.6	43.9	46.5